

氏 名 (国 籍) おむ 嚴 そ 錫 仁 (韓 国)

学 位 の 種 類 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 博 乙 第 1743 号

学位授与年月日 平成13年6月30日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

審 査 研 究 科 哲学・思想研究科

学 位 論 文 題 目 山崎闇斎学派の研究
—日本朱子学の位相—

主 査 筑波大学教授 文学博士 堀 池 信 夫

副 査 筑波大学教授 水 野 建 雄

副 査 筑波大学助教授 文学博士 伊 藤 益

副 査 筑波大学助教授 文学博士 佐 藤 貢 悦

副 査 筑波女子大学教授 文学博士 子 安 宣 邦

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は日本の山崎闇斎学派を主要考察目標に置いた近世日本思想史に関する論考である。日本思想史の論文ではあるが、本論文は考察の対象をたんに日本の中に止めることなく、「朱子の後継思想の展開」という視座から、その系譜を中国・朝鮮・日本と追跡し、さらにその間においてそれぞれが標榜する「朱子学」の内容の差異、すなわち思想的な遷変を跡づけ、さらに思想的にその性格を捉えることが難しいとされてきた闇斎学派（崎門派朱子学）の学者たちの思想を考究し、あわせて日本近世における朱子学の位置と意義とを考えるという構成をもつ。実に全東アジアを射程に収めての朱子学展開の研究であるといえる。

さて本論文は、崎門派朱子学について、一般的に朱子らの先学の反復的再構成と見られていたその思想的営為を、朱子学への主体的解釈行為と捉えることによってその解釈行為の特質を明らかにすることに成功したものであるが、そのための方法として朱子から闇斎学派に至るまでの朱子学展開において、特に挑戦朱子学者李退溪を媒介項に置き、羅整庵・薛敬軒との比較検討を行った。その結果として、朱子との差異・異同で考えられていた朱子後継の哲学者たちが、彼ら相互の間における差異・異同によって捉えられることになる。本論文の成功はこの方法的立場によるところが大きい。

本論文の論述は理気論を基軸に、朱子後継を崎門学派まで追うものであるが、著者がとりわけ苦心を払ったと見られるのは、従来李退溪の強い影響下にあるとされており、事実崎門学派の学者は李退溪に好意的評価を寄せていたにもかかわらず、彼らの思想は実は明の羅整庵に近かったことを明らかにしたところである。ここを梃子として、崎門派朱子学は現実への強い指向をもつ理気妙合の立場として捉えられてゆくのである。

第一章は、崎門研究に先立つ羅整庵と李退溪についての研究である。その第一節は羅整庵の思想である。羅整庵は朱子の「理一分殊」説を契機に、「理」を超越的・能動的なものを見ず、むしろ気の運動において定立する法則、気の理、と捉え、それによって自然的な情（欲）を認める人欲肯定、現実肯定論を思想史的に定立したとする。第二節は李退溪の研究である。李退溪は羅整庵とは正反対の方向、すなわち理の気に対する優位、理の能動性を朱子思想の確信として捉えたとする。とはいえ李退溪において理は気と遊離して超越的・独立的にあるものではなく、それを「吾が心に生きる」ものとして不安定な人間の現実を人間自身が打開してゆくその能力の具有として、実践主体的なものと捉えたとする。

第二章は、理気論をめぐる崎門学派の選考哲学者たちとの関係の検討である。ここでは先の羅整庵・李退溪に加えて、明の薛敬軒が加わる。第一節は崎門学派の李退溪への関係である。それは李退溪の理気論を表層的に捉えたものに過ぎず、むしろ李退溪の厳格な実践倫理とは衝突する可能性があったことを論じ、崎門学派の李退溪への表面的な好意的評価と、思想の内実は矛盾的なものであったことを明らかにする。第二節では、崎門学派は薛敬軒の思想に傾斜する傾向があるが、それは薛敬軒の理気論が「理気相即」「理気一体」という理の超越性から一步退いたものであったことに大きな理由があったことを論ずる。さらに第三節では、崎門学派が羅整庵を表面的には非難しているにもかかわらず、彼らの理気論は実質的には羅整庵と軌を同じくするものであったことを明らかにする。

第三章と第四章は、崎門学派における二人の重要な学者の思想研究である。

第三章は山崎闇斎研究であり、その第一節は闇斎の理気論研究である。『文会筆録』巻十の冒頭に載る黄勉斎・李退溪批判を手がかりに、闇斎が「太極図」の核心を陰陽五行の気の生成にあると見ていたことを論証し、それによって闇斎の理気論は理・太極の超越性にあるのではなく、理気一体・理気不可分の立場に立つものであることを明らかにする。第二節は、この理気論に基づき、闇斎の性論と敬論を論ずる。闇斎の性は「氣質の性」が中心であり、人間の実際の倫理的行動の出発点となる身体（氣質）を重視したこと、敬はそれに達するための過程手段と捉えていたことを明らかにし、日本の貝原益軒・伊藤仁斎・荻生徂徠らが朱子の敬に対して反対論を取っていたことと軌を一にすることを示す。

第四章は佐藤直方研究である。佐藤直方は伊藤仁斎・荻生徂徠とほぼ時代を等しくし、いわば反朱子学的思潮が風靡していた時期に、崎門学派として純然たる朱子学の徒をもって任じていた人物である。この時期、彼が崎門派としていかに朱子学に新しい生命を吹き込んだのか、またそれによっていかに時代に対応しようとしたのか、が論ぜられる。

第一節は、やはり理気論である。直方は、「太極図」における周濂溪の「無極而太極」をほとんど相手にせず、むしろ『易』『繫辭伝』の「易有太極」を重視し、理の超越性・能動性に関する議論には興味を寄せなかった。彼は、理が超越的・能動的であるにせよないにせよ、現実には理と気が一つの「妙合」という合一体として形成されていると捉え、この理気妙合としての現実が出発点であるとした。第二節は、その理気妙合の現実を一つの梃子として直方の人間理解について論ずるが、その際、性・心・敬などの問題は「主静」という内面を重んじる方向ではなく、「活物」としての人間性において理解されるものとする。そして直方は、聖人も賢人も基本的には身体と心を持ち、運動活動してやまぬ生の人間であるという理解から、実は朱子の思想もそうした活物的人間性を説くもとと把握しようとしていたとする。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、崎門派朱子学を、東アジアの朱子学の系譜という雄大な展望のもとに、独自の方法に基づいて分析したものであった。そしてこの研究において著書は、日本思想史研究におけるいくつかの新たな視点を確立した。まず理気論の解釈であるが、中国において、朱子の後継によって華々しく議論された「理気相即」「理先気後」「氣先理後」等の議論に通底する性格が、崎門学派にも明らかに存在していたことを示しえたことである。これは、日本における朱子学、あるいは近世日本思想史が、たんに日本の内部で、他とまったく独自の・孤立的に展開したものではないということを明らかにし、広く東アジア全体の文脈の中で捉えられなければならないということを実証したものといえ、今後の日本思想史研究に一層の広い視野を求めることになるものと思われる。

一方、著者は東アジアに展開したその理気論について、李退溪においては「理先気後」性、羅整庵・薛敬軒においては「理気相即」性ないし「氣先理後」性を指摘し、これとの対比において崎門派の「理気妙合」を明らかにしたが、この展開の方向は日本の朱子学においては理気は溶融する方向にあったということになるかと思われる。

る。だがこれは朱子学派としての崎門学が、自己規定をどのように考えるのか、あるいはさらに広く近世日本における朱子学の実存意義にもかかわることである。近世日本儒学には存在論的な「理」への関心が薄く、「事の理」「物の理」への関心が強かったことはすでに指摘されていることであるが、そうした「物の理」「事の理」としてでもなお「理」が維持されたことが近代的合理的思惟への前提条件であったことを考えると、崎門の溶融する理はたんに溶融したにとどまらず、何らかの展開方向をもったと思われる。そうした視点からの崎門派の再検討が望まれ、その際は近世日本の他の朱子学派との比較検討が必要と思われる。

また著者の論述が理気論という哲学的ないし精神世界的な問題が中心であったため、現実的・社会的問題、ないし民俗・民族の問題に関わって、朱子学の展開が模索されていない点は不満が残るところである。たとえば「宗族」問題がある。中国・朝鮮半島には宗族システムが存在していたが、日本にはそれがなかった。この相違はおそらく朱子学の東アジアへの展開においても決定的に重要な影響を果たしていたと思われるが、こうした問題についても何ほどの論究がはしかったところである。

こうしたいくつかの問題点を持ちながらも、本論文が崎門朱子学という難題を対象とし、中国・朝鮮朱子学との比較検討を軸として、その思想史的位置づけに成功したことは大いに評価できる。ことに中国・朝鮮・日本の文献を十分に読みこなす著者の能力と努力は高く評価する。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。